

己斐の歴史めぐり

神功皇后と鯉



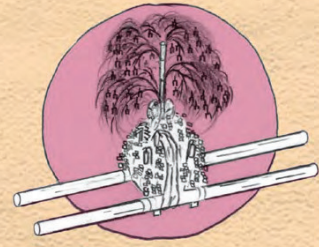
己斐のいわれは神功皇后
浦の名産黒鯉召され

植木屋次郎右衛門と盆栽



次郎右衛門 牡丹造りに
選んだ己斐の里

俵もみと木遣音頭



俵もみ飾ってよし
歌ってよし揉んでよし

己斐の歴史を巡る

「神功皇后に鯉を献上するところの絵馬」



明治30年9月旭山神社本殿完成を祝って奉納されたもの

「己斐の歴史上忘れえぬ人」

○神功皇后と黒鯉そして己斐

今から凡そ1800年前、西暦190～200年 仲夏天皇の時、神功皇后が三韓征伐の途上、その船団を率いて己斐の「御船着」に到着され、松山（後の旭山）に登られて野立された。その時、縣主が奉った黒鯉に感動され、「おお！鯉よ！鯉」と大層喜ばれたので地名を「鯉」とした。
713年（和銅6年）好字二字化令により「己斐」にしたと長く言い伝えられて来た。（左の絵はその情景をあらわしたもの）

○毛利元就と旭山八幡宮

1555年（弘治元年）9月25日 毛利元就は陶晴賢との嚴島合戦を前にして総勢3500余騎を引き連れて己斐産土八幡宮へ登り、戦勝祈願を行った。
折しも東天から朝日が昇り来るを見て、これは縁起良いことだ、我軍の勝利疑いなしと叫んだ。それから旭山八幡宮というようになったと言い伝えられて来た。

○浅野長晟とかつて日本屈指の盆栽・植木の町・己斐

1619年（元和5年）紀州から第三代広島城主として浅野長晟が広島へ入府のとき、大阪の牡丹屋次郎右衛門が牡丹づくりのため藩主に従ってきた。そして、牡丹づくりの適地として白羽の矢を立てたのが己斐であった。
このことが機縁となり、凡そ260年後の明治中期から植木・盆栽・花木の栽培が盛んとなり、大正、昭和10年頃にかけて、己斐がこれらの日本屈指の産地となったのである。
尚、父の牡丹屋は大阪に帰り、その息子の植木屋次郎右衛門が己斐に定住し、植木屋一代とされた。

「己斐の誇れる偉人」

○土井百毅

土井百毅は己斐の生んだ教育者で、明治維新における教育界の先覚者にして大功労者でした。代々の己斐村の庄屋で、明治始めの国内多難のとき、その私財をなげくって、広島で初めての中学校「選善会」を開校し、己斐小学校の前身となる「日影館」を設立した。又、没落した武士階級や窮民には米粟を借しげもなく差し出して窮乏を救った。
没後35年を経た1917年（大正6年）5月15日「百毅翁追善会」が己斐町に於いて盛大に行われた。「土井百毅碑銘」の碑が現在旭山神社の境内にある。

「己斐の地理と地形の特徴」

己斐は地理的には広島市の西部に位置し、昔は西国から広島城下への唯一の玄関口としての要衝の地であった。その機能を果たしたのが己斐橋である。それ故に江戸時代を通じて戦略上ずっと土橋（丸太を並べてその上を土で覆った橋）であった。
地形的には前面に山手川（現太田川）が流れ、背後には東から北、西へと100から400m級の山々が連なり、それらに囲まれた細長い山間の町である。このほぼ中間を北から南へ八幡川が流れ下り、山手川に注いでいる。これらの山々を越せば、旧石内村・旧大塚村・旧山木村があり、各々己斐・畑・鍛投げ坪（「とうげ」と言わず「たお」と言っていた）を通じて交通の発達していなかった頃は、広島市や相互の村の近道として人の往来が盛んであった。
これらの峠道の交わる要衝の地が己斐の沼田分れであり、その目標となっていたのが坊僧観音堂で現在も有る。

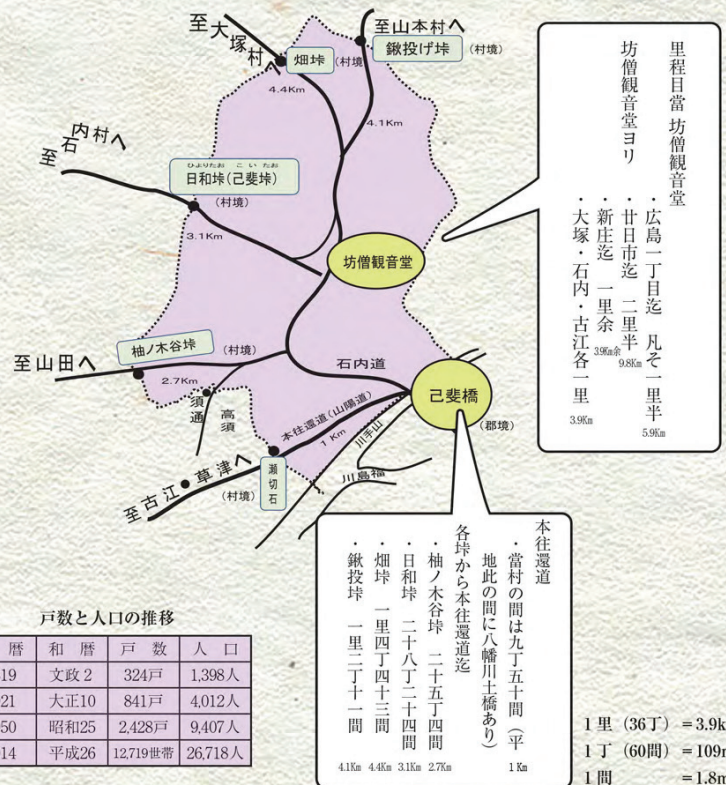
地図に見る己斐の移り変わり

1825年（文政8年）頃の己斐村地図



芸藩通志より

1819年（文政2年）「佐伯郡己斐村国郡志御用二付下調書出帳」の記述より



1950年（昭和25年）頃の己斐町地図



2013年（平成25年）頃の己斐町地図

